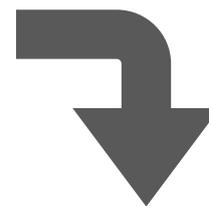


タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」



第21回：第3章-その6-

「対人援助と映画の邂逅」

著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲



レポートする一本をご紹介します

第16回目から第3章にはいり、各著者によって、対人援助実践のレポートを促す映画が紹介されてまいりました。そう、「対人援助をレポートする一本」の紹介でした。

「プリズンサークル」からはじまって、「生きる」、「カッコウの巣の上で」、「ペイフォワード」、「クレヨンしんちゃん 大人帝国の逆襲」、「誰も知らない」、「レナードの朝」、「グリーンブック」が紹介されました。

各作品をご紹介しますくださった著者に、感謝申し上げます。現時点で（2023年11月）、「プリズンサークル」と「クレヨンしんちゃん 大人帝国の逆襲」以外はすべて、私も拝見させていただきました。あと2本！

ところで…、だいぶ話は遡りますが、第6回目の「対人援助と本の邂逅」において、私、渡辺修宏は、1999年より読書記録をつけていることを記しました。そして、2007年から2022年度途中までの読書冊数記録を公開したのでした。

詳しくは、対人援助学マガジン第49号の、291ページから294ページをご一読ください。

サイトアドレス

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol49/48.pdf>

さて…。

ええ…。

そうなんです。もう、お気付きの通り、私、読書冊数記録のみならず、映画鑑賞数記録も残しているのです。

というわけで、今回は、その軌跡について、少々こぼしていきたいと思います。

もしよろしければ、最後までお付き合いください。

対人援助実践のために映画に浸る

読書同様、記録をはじめたのは、確か1999年の初頭でした。以前もお伝えした通り、ノストラダムスの大予言はもちろん、介護保険制度施行を直前に控え、まさに福祉サービスの抜本的な改革がすすもうとする、我が国の社会福祉業界がてんやわいや大騒ぎしていた頃でした。

当時は、フロッピーディスクにその記録を残しておりました。ただ、データがクラッシュしてしまいましたので、現在わかっているのは、2008年以降の記録となっております。

というわけで、現在確認できる記録（鑑賞本数）をみると、2008年以降は、次のようになっています。

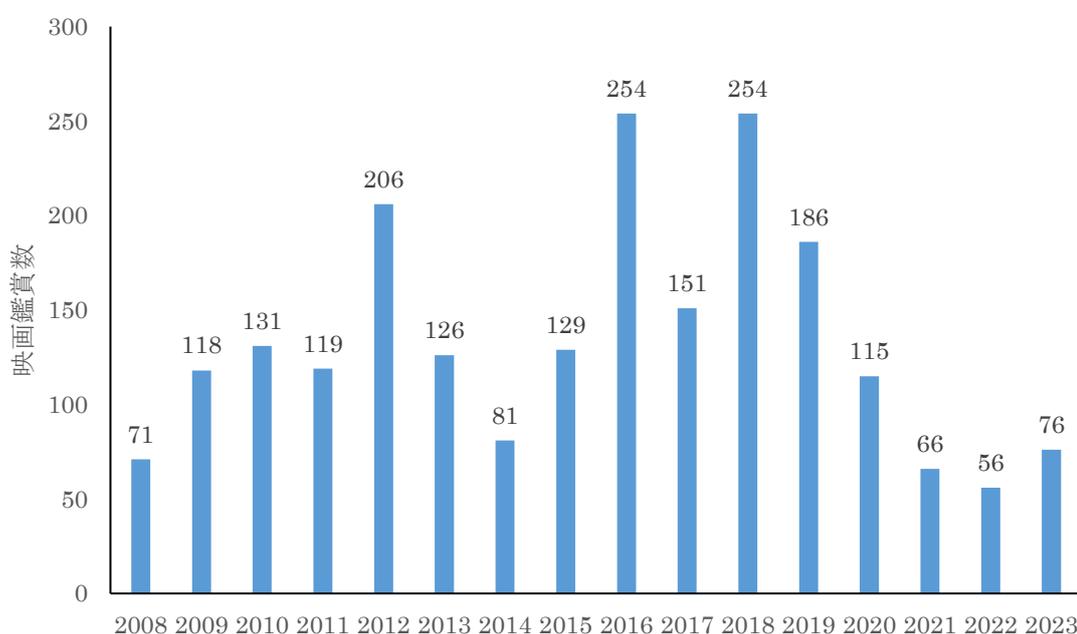


図1 年別映画鑑賞数

2008年, 71本。

2009年, 118本。

2010年, 131本。

2011年, 119本。

2012年, 206本。

2013年, 126本。

2014年, 81本。

2015年, 129本。

2016年, 254本。

2017年, 151本。

2018年, 254冊。

2019年, 186本。
2020年, 115本。
2021年, 66本。
2022年, 56本
2023年, 76本 (2023年11月15日現在)。

年別鑑賞数に、かなりばらつきがあるようです。その増減に、読書数との関係があるのかもしれないとちょっと感じましたが、…おそらく、特にないと思います。

一応、図2に、年別読書数を示します。対人援助学マガジン第49号に掲載された、第6回目の「対人援助と本の邂逅」で示したグラフです。

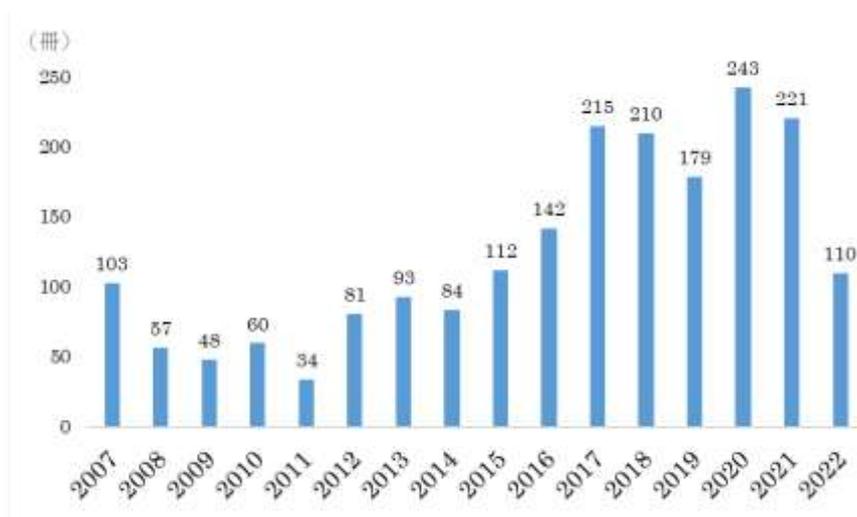


図2 年別読書数

例によって、「どんなジャンルの映画をみてきたのか」といったことや、「そもそも具体的な映画タイトルは何か」ということを整理しようとする、莫大な時間がかかってしまうので、またまた断念致します。

また、同じ映画を何度かみるということがあっても、別カウントしております。不思議なもので、またみたくなる映画もあるのです。そもそも、過去にみたことをすっかり忘れてまま鑑賞しはじめ、「あれ？これ、前、みたことあるじゃん」と失笑することは、読書同様、一度や二度ぐらいではすみませんでした。

ちなみに、そのような繰り返しみてしまう映画の多くは、世間で「名画」とよばれているような作品でした。洋画、邦画、アニメ、関係なくです。そういった意味で、「ああ、自分のセンスが、決して世間から乖離しているわけではないのだなあ」と、ちょっと安堵感を覚えました (笑)。

それと、最近気づき始めたのですが、どうも私の映画鑑賞には、ある種のいきおいがあるようです。ある時ふと映画をみて、「続きをみたい」、「もっとみたい」となると、鑑賞

日間隔をあまり空けずに連続的にみるようですが、ある程度作品をみて、おちつくと、まるで小休止するようにしばらく映画をみなくなるのです。その意味で、「映画をよくみるシーズン」と、「映画をあまりみないシーズン」が交互にやってきているようです。そして、「映画をあまりみないシーズン」にはいると、読書行動のほうが頻繁になっているようです。これまでの映画鑑賞記録、そして読書記録から、自分行動パターンが少し、発見できました。

対人援助実践のために映画をみることを忘れて

それと、最近思うのですが…、もう映画をみるときに、「対人援助実践をレポートする」ためにみているということを完全に忘れていきますね。私。

みたいからみる、というより、無心に作品を選んで、みているという状態です。

なぜそれを手に取ったのか、と、自問すると、その答えは、その作品をみることによって何かを感じるんじゃないか、気付けるんじゃないか、という「ワクワク感」であったり、「ゾクゾク感」であったり、「吸い込まれる感」に誘われたから、というふうになります。もう意味不明です。正確には描写できません。

もちろん、ただ闇雲に見ているわけではありません。引き込まれる要素が乏しい作品はできるだけ除去している自分に気づきます。若い頃と違って、「いくらでもある時間」など私の生活にはありえないので、限られた機会に、良作だけを見ようと思っているのです。自分の仕事、生き方になんらかのよい刺激を与えてくれる作品だけを、探していると思っています。

これまでの人生で数千本、場合によっては1万以上の作品を見たと思いますが、…まだまだ私の知らない良作がこの世界にはいっぱい眠っているのしょうから、みなさん、イチオシの素敵な作品があったら、ぜひご紹介してください。お願いします。

—つづく—